

平成 27 年度第 4 回グローバル教育推進委員会議事録

1 日 時 平成 28 年 2 月 2 日 (火) 9:30~12:00

2 場 所 高知共済会館 (3 階 会議室 藤)

3 出席者

【委員】 石筒覚委員、江原美明委員、葛城崇委員、坪谷ニューエル郁子委員、長崎 政浩委員、
中山 雅需委員 (座長)、

【オブザーバー】

高知南中学校・高等学校 校長 (谷岡)、副校長 (廣瀬)

高知西高等学校 校長 (松木)、副校長 (谷)、教頭 (市原)、教諭 (井上、和田)

【県教育委員会事務局】

小中学校課 指導主事 (谷口)

高知県教育センター 部長 (岡本)、チーフ (武市)、

指導主事 (南、田中、渡部、樫尾、上田、竹本)

高等学校課 課長 (藤中)、企画監 (坂本)、課長補佐 (高野)、チーフ (松井)

指導主事・主査 (市原・野中・久保・阿野田・前野)

4 協議事項

「1 年間の各研究における成果と問題点、および次年度に取り組むべき課題について」

教育センター (武市チーフ) から①探究型学習の進捗状況と課題について、②英語教育の進捗状況と課題について説明があり、その後、質疑応答を行った。

委員：

・まず探究型学習について、ご質問やご意見をお願いしたい。

委員：

・知識構成型ジグソー法を取り入れる前と後では、振り返り等で記述に変化があったか。

事務局：

・知識構成型ジグソー法の授業では、最初と最後に必ず学習課題について、生徒は自分が知っていること理解していることについて、一定量を書くことがフォーマットになっている。高知南中高の実践の中では資料にもあるように、授業後は書く量も非常に増えている。書かれてある内容もはじめは表面的なことにしか触れられていないような表現であったが、学習会台について個人やグループで考えたり、資料をじっくり読み込んで、グループで話し合ったりすることで、授業後は、他者の視点を取り入れながら自分の考えを深化していったという過程がうかがえた。このように、授業をどこまで理解できたのかについて、文字で書く活動は、国語科だけでなく他教科でも同様に取り組んでいる。学習者が、自分の理解を振り返る機会を積み上げつつある。

委員：

- ・この知識構成型ジグソー法は、振り返りの時間を多くとることが特徴である。自分がどう感じたのか、考えたのかを記述する必要がある。通常の講義では、生徒がどのように理解したのかをテストのみで理解度を見るケースが多い。思考力とか判断力などを把握する際には、本当は一人一人インタビューすれば良いが、時間的に難しい。評価に関する協議事項にも関連すると思うが、今、高知大学地域協働学部では、15 項目のルーブリックを作成中である。基本的には学生が記述によって思考や共感などを表現するが、文章の表現力の差異で評価してはいけないので、評価できる表現になるまで、添削して戻すことを繰り返し行い、必要なデータが集まった時点で評価する。適切な評価をするためには、評価側のトレーニングが必要であることと、生徒側の「書く」能力の育成をしなければならない。

委員：

- ・文章表現が上手であれば、思考力が深まっているように感じるが、どういうことなのか。

委員：

- ・表現が上手いということと課題に対して思考していることとは同じではない。また、書けていない場合でも、思考していないから書けていないのか、表現力がなくて書けないのか、添削して戻して「ここはどうだったか」と引き出していく必要がある。

委員：

- ・高知南高校の生徒の感想を見ると、「これだけ頭を使ってしんどかった」というところまで実践されており、素晴らしいと思う。
- ・ここで言う評価とは、評定に結びつけるための総括的評価を言っているのか、考え学ぶプロセスで教員が返す形成的評価（フィードバック）を言っているのか、どちらか。

事務局：

- ・基本的には、学習のつながりを確認するための形成的評価のことである。一方では、学習の成果をどのように見取っていくのかという点もあるので、最後には総括的評価の視点もあると思うが、年間を見通した授業づくりについて 1 年間取り組んできたので、形成的評価の視点でも、ご意見をいただきたい。

委員：

- ・教員は生徒に対して的確な質問をしていくことである。それに対して生徒が答えを追求・探究していくということになる。この質問方法は以前もお伝えしたが、
 - ①課題に関しての事実（それは何なのか）
 - ②要因（なぜそうなったのか）
 - ③変化（時間軸の中でどのような変化を告げてきたのであろうか）
 - ④視点（課題に対してどういう視点があるのか）

- ⑤役割・機能（どのような役割を担っているのか。どのように機能しているのか）
- ⑥結びつき（他のものと結びついているのか。どのようなものに影響を与えているのか）
- ⑦責任（それに対して、あなたは、私は、私たちはどんな責任があるのか）

これらのひとつひとつに内省がついてくる。7つの質問を紹介したが、すべての質問をする必要はない。課題に対して一番フィットする質問を選んでいく。これを加えると、より探究が深まるのではないか。

- ・子どもたちは、主体的に思考し探究していく。そこまでの過程の間に、子どもたちはいろいろなものを書いたり作ったりする。それを壁に貼って欲しい。子どもたちの思考を視覚化することでリマインドするだけでなく、子ども自身が自分の学びを誇りに思うようになる。ポートフォリオの中にキープしておく、後から振り返ることができる。例えば半年後に、自分の成長ぶりがわかり、これまでやってきたことを再現することができる。こういった機会も設けてもらいたい。

委員：

- ・テストだけで理解度が図れるわけではない。学習の積み重ねを振り返るといった発想が大事である。
- ・教員と生徒が話をする時間が取れると良い。その中で、振り返りやフィードバックができる。

委員：

- ・評価が先生方の取り組みを進歩させる鍵である。取組前は、実体験がないため評価規準の作成は難しいが、取組をとおして実体験をもとに、優先順位をつけて項目立てするといいい。

委員：

- ・生徒が学習評価を設計する（評価規準をつくる）ということもできる。探究型への観点として、今後の参考にしてほしい。

委員：

- ・学びの統合として、他の学習とどのようにつなげていくのかも大事である。

事務局：

- ・知識構成型ジグソー法の研究は広がりが見られるようになった。特に若手の教員が意欲的に取り組んでいる。今後、学校全体でより効果的に進めていくためには、どのようにしていけば良いのか。

委員：

- ・生徒たちに、事前に評価規準を示すということが重要である。例えば、自己管理能力を評価する、決められた時間内で実施する等、最初に明確に示しておく。そうすると、内省の時に自分でも評価できる。自分はゴール設定に対してどこまでできたのか、到達するにはどのようにしていけばよいか、考えることにつながっていく。

委員：

- ・英語教育にも共通している。WHYの質問を共通として、良い質問を考えることが大切である。

委員：

- ・ありがとうございました。これらのご意見を参考に、学校全体へ広げるようにしてもらいたい。オープンな場で生徒たちと活動をしていくと、広がるのではないかと思う。ぜひ、進めてもらいたい。次に、英語教育についてのご意見をお伺いしたい。

委員：

- ・授業実践記録について紹介したが、はじめは書類を作ることが教員の負担になるのではないかと心配していた。しかし、できあがったものを見ると、成果と課題が整理されていて良い計画になっていると思う。
- ・鍵は、教員が達成感を得られるかどうかであると思っている。誰がどんな生徒に実践しても、ある程度上手く、といった実践例の蓄積があれば、その方法を共有してみんなで実践してみる。教員同士が上手くいくと信じて実践する。その共有がよい雰囲気につながっていく。

委員：

- ・CAN-DO リストについて、2年から3年へのジャンプアップの度合いが大きいのが、何を根拠にしているのか。
- ・外国語は、母語の上に乗るものであるため、国語科とのすり合わせができていないと難しい。言語教育なので、互いに共有すべきである。

事務局：

- ・CAN-DO リストについては、学習指導要領・『「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』に基づいて作成している。これは、次年度用の計画である。3年次のジャンプアップについては、難しいのではないかと問いかけてみたが教員の意向もありこれにした。授業を実践していく中で、変更もある。
- ・国語科との連携は、今後、考えていきたい。

委員：

- ・聞く、読む、書くことから、「話す」ことへの転換も考えて欲しい。実践が上手くいかないということもある。学習の過程を整理しながら、指導へ結び付けてほしい。

委員：

- ・授業実践記録を見ると、成果と課題に多くの情報が含まれている。どうすれば成果にしていけるのか、計画を立ててサイクルをまわす。ある一定期間が経った時に、以前の記録と比較すると、成果が見られるのではないか。

委員：

- ・授業実践記録をつくることが目的ではない。これをどのように活かしていくか、それが教員のアクティブ・ラーニングにつながっていく。教科会を、日程確認や資料の突き合わせをする会にするのではなく、先生方の話す場にして欲しい。よりよいものにするにはどうしたら良いか、教員同士で話し合うことを続けて欲しい。それが教科会の場となって欲しい。

委員：

- ・先を見据えるのはいいが、足下が見えなくなることがある。先生方には振り返りシートを活用することで、「今」を拾うことの大切さを知ってほしい。振り返ることで、毎日の授業を工夫するようになり、それが楽しくなっていく。頑張っていて欲しい。

オブザーバー：

- ・教員の意識づけ等、まだまだ向上する余地はあるが、教科の取組をどのようにしていくかということではできていると思う。例えば、探究型学習は、常駐指導主事の呼びかけのもと、時間外でも勉強会に取り組む先生方がいる。
- ・ベテランの先生方もやってくれている。年間1回は探究型学習に取り組もうということで実施率は100%ある。学校の責任において、本年度の実践をまとめたパンフレットも作成した。
- ・現在は、本校だけで取り組んでいるが、ここで終わらないように、全体に普及していく計画を考えて取り組んでいく。
- ・様々な取組に対して、モチベーションがあがる教員もいれば、あがらない教員もいる。しかしモチベーションがあがらない教員がダメということではない。そういった教員は低学力層の生徒の指導が得意だったりする。先生方の頑張りをもっと示していきたい。

委員：

- ・高知西高校の取組に感銘を受けた。身近な問題を国際的な問題と捉えている着眼点が、素晴らしい。エビデンスをたてていくことが、日本の教育を変えていく大きな力になる。
- ・プレゼンテーションが苦手な生徒もいるが、生徒に表現方法の選択肢を与えて、自分で考えていく。さらに、その表現方法の良い点、悪い点を考えさせて、方法の多様化をはかることをしてもらいたい。
- ・評価については、データを是非蓄積して欲しい。また、全国に発信してほしい。
- ・費用対効果ということを、財務省から厳しくいわれる。SGH 事業でエビデンスをしっかりと入れて欲しい。

委員：

- ・グローバル探究Ⅰの中で、教員がどのような役割を果たすのか、そういった部分もしっかりと考えて欲しい。教員が知識を与え、調べ学習をして、最後に上手なプレゼンをすればいいだけの取組にならないように、役割をきちんと考えて進めて欲しい。

委員：

- ・実践しながら、ルーブリックの修正を常にして欲しい。項目も変更することがあると思うが、学びのプロセスになっているものにして、生徒個々への対応に活かしてほしい。
- ・こういった取組を進めていくと、生徒の質問も高度になってくる。それに対して教員がどのようなアドバイスをしていくのか。一人で抱え込まないで学年を超えて先生方と共有する時間を設定することが大切である。

委員：

- ・ルーブリックの作成については、1つの枠にいくつものスキルが入っているので、細分化するように留意してほしい。今後の見直しも含め、項目の選定の必要性がある。

オブザーバー：

- ・SGH 事業は、この会でいただいた多くの意見を参考に実践してきた。現在は、アイデンティティをどのように築いていくのか、価値観をプラスしてどのように結び付けていくのが課題である。
- ・教員の関わり方については、教えたなら終わりではなく、生徒と共に汗をかけるように努めたい。ここまできたので、元の形に戻らないように、進めていきたい。

委員：

- ・ありがとうございました。本日いただいたご意見を踏まえ、次年度の計画・取組にいかしていただきたい。